まいんど マインド Mind

修法師の誕生

藤田 庄市 ジャーナリスト

シリーズ〈141〉

本年1月26日、日蓮宗遠寿院（千葉県市川市）の鬼子母神堂である。

荒行まっただなかの行僧が木剣（剣形の板）を勢いよく振ると、括られた数珠が木剣に当たり乾いた独特の高い音を轟かせ、その音に読経三昧で鍛えられた大音声の祈祷肝文が、行僧の切れの良い動作と融合し迫力をいっそう強めてゆく。

10人弱の行僧が参拝者たちを取り囲むべく広がろうとしたその時、カトレット美恵子（英語教師、66歳）は、大きな布の幕が頭上から被せられた実感がたしかにあった。重みは感じないのに、それは重厚だった。すると涙が「爆発するように」止めどなく溢れてきた。悲しいとか嬉しいとか、感情は湧くことなく、感情を探る気も生じなかった。願いごとは言いたくなかった。

「魂が喜んでいる」

そんな意識が涙となって現れたと、後で思った。

「見ていてくださいね」

鬼子母神やありとあらゆる神々が自分を見てくれる力を感じた。荒行僧がもとの位置に立つと涙は止み、幕の感覚も失せ、意識も普通に戻った。「ほっとした」という。

参拝者にこうした体験をもたらした祈祷力の源泉は荒行にある。荒行を成満して修法師の許証を与えられ、はじめて祈祷を許される。では、荒行とはいかなるものか。

遠寿院の荒行は400年以上の法統を受け継ぎ、毎年11月1日～2月10日までの寒百日間、結界された荒行堂に籠る修行である。なぜ「荒行」なのかといえば、1日7回寒水をかぶる水行、2回の粥の食事、法華経の読誦三昧、そして睡眠は3時間、という過酷な修行環境ゆえである。ひげは伸び、素足はあかぎれとなる。その姿が参拝者の前に現れるのである。

2024年度の入行僧は、四行（4度目）1人、参行1人、再行2人、初行5人だった。そのうち初行僧の中山大智（29歳）に焦点をあて、いかなる鍛練を経て修法師となるかを素描しよう。

最初の35日間、行僧は徹底的に滅罪を果たした後、12月に入り荒行の要である「木剣相承」となる。中山も伝師の戸田日晨（最高指導者。以下、日晨）から木剣を授与され、寒風のなか練習に臨んだ。学生時代、野球に熱中した中山だが、肩甲骨周辺が普段使わない筋肉のため痛さが尋常でなかった。初日にギブアップすら頭をよぎったほどだ。木剣作法が伝統的な身体動作のため、現代日本人の日常の動きとギャップがあるためだろうか。「きれいに振りたい」の思いに耐え、7日ほどすると慣れてきた。

ところが腕の振り方に注意を集中すると、祈祷の声が小さくなる。さらに姿勢が前屈みになってしまう。四行の峯村法応（49歳）や再行の般谷壽真（31歳）が付ききりで指導した。「背筋をのばせ！きれいに見せるのはひとつの技だ！」。峯村からよく叱咤された。目もつぶりがちになった。「目を開けろ！」。霊の影響か、時に暴れだす人がいるという。受者をしっかり見ていなければならない。

作法が身についてくると無性に練習をしたくなった。夜に自主的に練習を始めると般谷が見てくれた。彼は熱い男で厳しかったが、それは、自分の初行の時の経験を惜しみなく教えてくれる暖かさに裏打ちされていた。

「（木剣の）音や鳴らすことに気をとられず、型をきちんと覚えろ」

先輩僧の注意の言葉だけ聞いていると動作、外形のみの訓練のように思える。しかし行というものは、動作を繰り返し作法を体得してゆくなかで、精神の高みに至るものである。では、荒行の宗教的理想とはいかなるものか。伝師の日晨は次のように説く。

「久遠実成の釈迦牟尼仏の強大なエネルギー放射が根本にあり、修法師は法華経行者擁護の鬼子母神の存在を強く観想することによりエネルギーが祈祷の受者に伝わって病気平癒などの影響を及ぼします」（趣旨）（注①）

参行の戸田善斉（36歳）は祈祷の心構えを中山たち初行僧たちにこう語った。

「自分で（祈祷を）やってやろうとの考えはもってはならない。自分は鬼子母神からいただいてる力の中継点。自分がやっているという考えはなくせ」

木剣相承の外形は型の伝授であるが、そもそも荒行の核心は次の偈文にある。

「寒水白粥凡骨将死」は荒行の姿であり、「理懺事悔聖胎自生」は宗教的理想、つまり身心の深い内省を経て、聖なる存在を自分の内に生まれせしむる、ことにある。

中山は木剣を振る型を伝師や先輩の行僧から教えられ、獲得するごとに、こう考えるようになった。

「大尊神（鬼子母神）の力をいただくのであって、自分の力ではない。自分の声や木剣が人を救うのではない。勘違いをしてはならない」

正月を迎えた。まだ修行中であるが、初行僧も参拝者に木剣を振ることが許される。

「感動しかなかった」

それも並みの感動ではない。なぜか。じつは中山は日蓮宗寺院の子弟であるばかりでなく、父親がやはり遠寿院で荒行をおさめた修法師であり、一歳のときから遠寿院にお参りに連れられ祈祷をうけてきたのだった。とくに中一の時、父親が導師として祈祷をする姿に接して、「いつか自分も」と夢みてきたのである。さらに感動したのは2月3日。導師、すなわち行僧の中心の位置で木剣を振ることを指示された。「思い切って楽しんで堂々とやれ」。般谷にそう励まされ、座に着いた瞬間、涙が溢れた。夢が実現した。

「今からどうか皆さまの願いが叶いますようにこの木剣に力を下さい」

尊神に祈り木剣を振った。しかし導師としての所作に気を取られ「100%、参拝者のために祈祷できたのだろうか」との戸惑いが残った。2月10日の成満会、中山は許証を与えられ、晴れて修法師となった（なお、初行僧2人は満行したが、許証は出なかった）。自坊の帰山式では100%の祈祷ができたと思えた。心は次の入行に飛ぶ。自分の受けた法統を初行僧に伝え、遠寿院を盛り上げてゆきたいと考えている。

百日間の行を終えた修法師たち。右は祈祷を受けた体験を語る田口さん

祈祷する人／受ける人 信仰の源は鬼子母神

中山が法と血筋を父親から受け継いだように、遠寿院には親から信心を受けついでいる信徒がいる。田口美智子（美容院経営、57歳）もその一人。父親が遠寿院の修法師だった今井海陽（故人）の信者だったことから、10歳のときから連れられて正月には祈祷を受けに参拝していた。ご開帳された鬼子母神像はキラキラし笑顔に見えた。「神様はほんとにいるんだ」と思った。今井は「霊能者」でもあり、信者から様々な相談を受けていた。田口が就職先候補の美容院をいくつか相談すると、見習い生活は大変だが早く技術を覚えられるという店を指示した。本当だった。田口が20代半ばのころ、今井は世を去ったが、信心は田口にすっかり根付き「生活の一部」となり、鬼子母神はすごい女神で女性を守ってくれる存在である。その後、勝見龍照（見塔寺住職）の衝撃的な祈祷をうけ縁ができ、遠寿院には月2～3度のお参りを欠かさない。

田口は祈祷の時「ガーッと自分ではない意識が出て来そうになる」ことがある。それを彼女は「因縁」と捉える。彼女のルーツは400年ほど前に東京・江戸川区の土地を拓いた家系にある。だから本家の娘が超一流大学の医学部にトップで合格した話を聞けば、「徳は（先祖から）流れてくる」と感じる。

一方、良くない因縁も自分に宿命としてあるだろうと思う。だから祈祷では先祖供養とあわせ、「因縁消滅」を優先し、なにか特定の願いをすることはない。

「大きな石（災難）が小さくなるように」と、遠寿院の正月の祈祷には知り合いに声をかける。30人ほどが一緒になるが、講というわけではない。「みなさん、大変なことが起こらないで、良くなればいい」と誘うだけである。

【追記】統一教会（通称、世界統一平和家庭連合）が脅迫的宗教レトリックに用いる「因縁」の反社会性をあらためて考えてしまった。

◇

注①藤田庄市「水行・白粥・読経の荒行」『修行と信仰』（岩波書店）

ふじた・しょういち／1947年東京生まれ。フォトジャーナリスト。主な著書に『行とはなにか』（新潮選書）『修行と信仰』（岩波現代全書）『現代山岳信仰曼荼羅』（天夢人）など。